

細川道久『ニューファンドランド
—いちばん古くていちばん新しいカナダ—』
(彩流社、2017年)

木野淳子

1949年3月31日、ニューファンドランド・アンド・ラブラドル州(以下、ニューファンドランド)がカナダに編入されたのは周知の通りである。ニューファンドランドについては、通史の中で、初期のニューファンドランドの漁業や、連邦結成時の不参加とその後のカナダ編入について触れられても、一部の研究⁽¹⁾を除けば、これまで日本において本格的に研究されてきたとは言えまい。本書では、カナダ史をイギリス帝国史の文脈で捉え、またグローバル・ヒストリーに位置付けるべく研究を続けてこられた著者が、ニューファンドランド史に取り組み、研究者のみならず一般の読者にもカナダ最東端の地の重要性を広めようとするものである。

本書の構成は、「第I部カナダ編入前史」、「第II部カナダ編入」の二つに分かれ、五つの章からなる。まず、著者は、「はじめに」において、ニューファンドランド史に注目する理由を次のように述べている。(1)「大陸横断国家」カナダが「海洋国家」でもあることを示し、中央カナダと沿海地方、西部を大陸横断鉄道で結ぶことを強調した一国史の枠を超え、グローバル・ヒストリーの文脈にカナダを置くことが出来る。(2)「植民地からドミニオン、ドミニオンから主権国家へ」となったカナダに対し、同じ「ドミニオン」とはいえ、むしろ植民地に近かったニューファンドランドを扱うことで、様々な「ドミニオン」があったことを明らかにしてイギリス帝国史に寄与する。(3)「北大西洋三角形」—英米加関係の中で、ニューファンドランドが果たした役割に注目することで、従来の北大西洋関係史の視点を広げる。では、以下に本書の内容を見ていきたい。

第I部の「第1章 イギリス最古の植民地」では、1497年のジョン・カボット以降、この地の漁業をめぐるヨーロッパ、特に英仏の覇権争いとその決着がつく1763年まで、ニューファンドランドが英仏にとって漁業の拠点だけでなく、大西洋をまたぐ経済活動においても、軍事拠点としても重要であったことを示す。1583年に「イギリス初の海外植民地」となったニューファンドランドにとって、1763年に北米大陸での覇権を失ったフランスがサンピエール島とミクロン島の領有だけでなく、1904年まで「フランス海岸」

での漁業権を持っていたことが、長くこの地で問題となることも改めて指摘されている。また、通常の定住型・農業主体のイギリス領植民地と違い、漁業主体の植民地であったため、ニューファンドランド独特の法慣習「フィッシング・アドミラル」制（シーズン最初に到着した船団が最も良い漁場や浜を獲得し、その漁船団長が湾内の治安を取り締まる）が、18世紀末まで存続したことも特徴的である。

「第2章 カナダとの統合案の挫折」では、大陸側の英領北アメリカの状況と比較しつつ、英仏抗争後から19世紀なかばまでのニューファンドランドの統治制度の進展（1832年選出制議会設置、1855年責任政府樹立）に触れた後、1864年のケベック会議に代表を送りながらも、1867年7月1日に誕生した「ドミニオン・オブ・カナダ」に加わらず、また、その後20世紀初めまで数回あった統合構想も実を結ばなかったことを明らかにしている。1864年のケベック決議に対する反応として、アイルランド系カトリックの住民にとっては、ニューファンドランドがカナダと一緒にするのは、イングランドによるアイルランド併合を思い起こさせるものであったとの指摘は興味深い。何より、もともと北大西洋の一部として異なる歩みをしてきたニューファンドランドには、大陸側の防衛上の不安も大陸横断鉄道のメリットも共有せず、そのため「ドミニオン・オブ・カナダ」には加わらなかった。20世紀に入って、1913年から3年間、ニューファンドランドで政権を担ったエドワード・モリスがカナダ首相と非公式な交渉を行った（69頁）とのことだが、これは時期的にロバート・ボーデン首相であろう。

「第3章 名ばかり『ドミニオン』の果てに」では、カナダにとっては、第一次世界大戦を経て「植民地からドミニオン、ドミニオンから主権国家へ」発展する時期に、ニューファンドランドの地位は限定的であったことを示す。カナダが1918年のヴェルサイユ条約に署名し、正式な外交権をまだ獲得していなかったものの国際連盟や国際労働機関に加盟したのに対し、同条約への署名も国際連盟等への加盟もできなかったニューファンドランドは、確かに同じ「ドミニオン」としてひとくくりにはできない。しかし、ニューファンドランドが「ドミニオン」の地位になったのは1907年であり、10年後によく「ドミニオン」の名称の使用を許されたものの法的名称ではなく、総督の文書ではこれまで通り「ニューファンドランド植民地」が使用されたことから見て、またそれに対する不満も生じなかったのであれば、この時期のニューファンドランドがカナダと同等の扱いを受けなくても当然にも思える。それは、1926年の帝国会議でのニューファンドランド代表ウォルター・モンローの「イギリスの最も若い『ドミニオン』というよりも、イギリスの最も古い植民地と呼ばれるのを」望む（86－87頁）という発言に象徴されている。さらに、ニューファンドランドは、1929年の世界恐慌による財政破綻のため、1855年以來の責任政府の機能を停止した。総督と行政管理政府による統治は、イギリス政府の指示に従って行われ、「植民地どころか、限りなく従属地に近い」（92頁）地位まで後退した。

第II部の「第1章 第二次世界大戦のスポットライト—北大西洋防衛の要として」で

は、20世紀前半のニューファンドランドの空と海の交通での重要性はもちろん、第二次世界大戦によってこの地が英米加にとって重要な軍事拠点となり、その後のカナダ編入につながる過程が描かれる。また、ニューファンドランド側も、防衛の手薄さを懸念する行政管理政府がカナダに支援を求め、軍事面で両者の関係が深まった。この時期、カナダは1941年には駐ニューファンドランド高等弁務官を任命し、またカナダ・ニューファンドランド間の民間航空の定期便を実現させるなど、積極的にニューファンドランドに関わるが、それはまた、第二次大戦中ここに基地を置いたアメリカの影響力を懸念し、この地が「第二のアラスカ」になることを恐れたとの指摘は、非常にわかりやすい。この大戦によってカナダとの軍事的、経済的関係は強まり、両者の統合への環境が整いはじめたのである。

かくして、本書は「第2章 カナダ編入への最終章」へ続く。1970年代末の資料公開によって1980年代以降に進んだ新たな研究で、ニューファンドランドのカナダ編入に及ぼしたイギリスとカナダの影響力の強さが示されると、カナダへの編入は、両国と編入支持派で初代ニューファンドランド州首相となるジョゼフ・スモールウッドらによる陰謀だと主張されるようになった。著者は、この「陰謀説」からも、それまで主流だったスモールウッドの功績を重視する「ラスト・ファーザー史観」からも距離を置き、ニューファンドランドのカナダ編入の過程をたどることを試みる。確かに、明らかになるのは、イギリスとカナダが、ニューファンドランドのカナダ編入に積極的に関わり、なおかつそれがニューファンドランド側からの意向として出されるよう慎重に事を運んだ様子である。ニューファンドランド住民の多くがカナダ統合に反対であったことは、1946年に設置されたニューファンドランドの住民代表者会議が、スモールウッドらの活動や熱弁にもかかわらず、あくまでもカナダ編入以外の選択肢（責任政府復帰か現状の行政管理政府）に固執したことからもわかる。しかし、結局、同会議の意向は無視され、イギリス政府が「ニューファンドランド住民への配慮」として、住民投票の選択肢にカナダ編入を入れたことが、イギリスの影響力を如実に示すものである。それでも、1948年の一度目の住民投票では、責任政府復帰派と編入支持派は拮抗して決着がつかず、また、セントジョーンズ周辺は責任政府復帰を支持、それ以外の地域（ニューフィ・イングリッシュで「アウトポート」と言うとのこと）はカナダ編入支持と、地域的な分裂があった。二度目の住民投票でかろうじてカナダ編入が勝利を取めたが、ニューファンドランド州誕生を、区切りの良い4月1日にしなかったのは、カナダ編入記念日をエイプリル・フルと結び付けられなくなかったため、当時のニューファンドランドの世論がカナダ編入をめぐる二分されていたことを示していよう。

本書によって、それぞれの事情ですれ違い、なかなか実らなかったニューファンドランドのカナダ編入に至る経緯と、編入でのイギリスとカナダの影響力の大きさが詳細に明らかにされた。では、ニューファンドランド住民の主体的な動きについてはどうか。

なぜニューファンドランド住民が、そこまで大陸側のカナダとの統合に反対したのか。私事ではあるが、評者は以前ノヴァスコシアからニューファンドランド島のポルトー・バスクまで7時間フェリーに乗り、荒涼たる広大さの中、点在する美しい漁村を見ながら2日間ドライブして、島の南東部のセントジョーンズまでたどり着いたことがある。その時確かに大陸カナダとの距離を切実に感じた。また、大陸側に面する島の西部が「フランス海岸」として長く入植を禁じられていたことも大きかったであろう。それが、20世紀に入って、交通手段、コミュニケーション手段の進歩で大陸との距離が縮まり、また、スモールウッドがカナダ編入支持を訴えるのに効果的に使用したと言われるラジオ放送も、19世紀には隣村との交流さえなかったと言われる点在する漁村をつないで、情報を素早く伝え、僅差とはいえ最終的にカナダ編入につながったのではないか。

また、なぜ住民投票の結果が地域的に分裂したのか。セントジョーンズ周辺の商人と、「アウトポート」の漁民との間には、それまで長く続く経済的な上下関係があった⁽²⁾。スモールウッドらによるラジオ放送や集会などの大々的なカナダ編入キャンペーンのおかげもあっただろうが、根本的に、「アウトポート」の住民たちのセントジョーンズの商人たちに対する不信感が、責任政府支持を否定し、僅差でのカナダ編入という住民投票の結果につながったと言えよう。欲を言えば、19世紀における両者の関係に踏み込んだ記述があれば、住民の主体的な動きがより浮き彫りにされたのではないか。

本書は、一般読者の理解も深まるよう、カナダとニューファンドランドの状況を比較して説明するよう工夫もされている。また、さらにニューファンドランドに関するコラムや様々なエピソードが挿入され、例えば7月1日やウェストミンスター憲章のカナダとニューファンドランドでの意味合いの違いや、シグナル・ヒルがフレンチ・アンド・インディアン戦争の最後の戦場であったことなど、これまでカナダ史の文脈では見落とされがちであった事実について、評者も改めて知識を得ることができた。また、本書の性格上、注を付すことは難しいと思うが、少なくとも索引があれば、誰にとっても本書がより有効に活用できたのではなかろうか。とはいえ、本書がカナダ史にその最東端からの視点を提示し、ニューファンドランドの地図と巻末の参考文献リストとあわせ、この地についてさらに学ぶ機会を広げた功績は大きい。

注

- (1) 竹中豊「第7章 ジョン・カボットとニューファンドランド—神話と伝統の狭間で—」『カナダ 大いなる孤高の地—カナダ的想像力の展開』彩流社、2000年、162-181頁。
- (2) 両者の関係は、後者から前者への借金だけだったとさえ言われる。木村和男『連邦結成一カナダの試練』NHKブックス、1991年、154頁。W・L・モートン著、木村和男訳『大陸横断国家の誕生—カナダ連邦結成史 1857～1873年』同文館、1993年、58-61頁。

(きの じゅんこ 東京外国語大学・東洋英和女学院大学)